中国新聞　2004年（平成16年）8月24日（火曜日）

被爆の苦しみ赤裸々に

日本基督教団広島教会が証言集

創立120周年記念 延べ194人

「被爆教会の証しを記録として残そう」。日本基督教団広島教会（広島市中区大手町、桜井重宣牧師）が創立百二十周年を迎えた記念誌として、教会員たちの被爆証言集「あの日・あの時」を刊行した。被爆会員の心の扉は深く、悲惨な体験を語れるまでには四十年の歳月を必要とした。本書では、教会員が心の封印を解き始めた一九八四年から二〇〇三年までに、教会月報に掲載された延べ百九十四人の被爆体験や証言を収録した。（光尾章）

広島教会の創立120周年記念誌として刊行された被爆証言集「あの日・あの時」

八月の広島。真夏の日差しが照りつける前の、静謐な朝の光が原爆ドームからクロスとなって輝く。冒頭を飾る「朝の祈り」と題された写真は、教会員の西名一彦さん（＝福岡市在住＝）が、被爆五十年目に、原爆で亡くなった師の死を悼んで撮影した。西名さんは、この年八月の平和礼拝で、初めて被爆体験を語った。

84年に月報復刊

すべてを奪い去り、消し去った原爆投下の事実に対し、大きな悲しみ、苦しみを背負った被爆会員は固く心を閉ざした。被爆から四十年が経過した八四年に、途絶えていた教会月報が復刊。徐々に教会員の被爆体験を語った。

同教会は一八八三年十一月、広島の地で初めてのプロテスタント教会として創立された。殉教者を出した創始期の迫害など、苦難の時代はあったが、壊滅状態に打ちのめされた被爆の事実は、衝撃を伴い、教会の歴史に刻み込まれた。

被爆から一年で教会報を刊行。四九年には青年会を中心に、文集「みぎわ」も年二回発行されるが、いずれも教会員が原爆に触れる記述はない。

死没者追跡調査も

原爆によって教会は倒壊、貴重な資料が多く失われたが、人的被害も甚大だった。「原爆水眠会員の追想」のページでは、三十七人の被爆場所、爆心からの距離、死亡場所、年齢などを記した一覧表を掲載。

命の重さ伝える

「一瞬にして生命を奪われた教会員の生きていた証しを残そう」。墓苑委員だった前原泰治さん（＝呉市在住＝）は、百年史の作成を機に八三年から、原爆死没者の追跡調査を実施。証言を求めて各地に足を運ぶ地道な調査で、九七年までに判明した死没者の被爆状況、納骨先などを、追想の中で克明に記録した。

被爆から五十九年目の今夏、広島教会の平和聖日礼拝で、一人の被爆会員が重い口を開き、初めて証言した。

「証言集刊行の背後で、いまだに語れない、書けない被爆会員がいること、その苦悩も分かってほしい」と桜井牧師。「こはいう。続けて「証言集を若い世代に読んでもらいたい。亡くなった一人ひとりの命の重さを、大切さを、しっかりと受け止めてほしい」と訴える。

日本基督教団広島教会